

【研究会抄録】

第27回島根新生児研究会

日 時：令和5年2月5日(日) 13:00~16:30

会 場：以下の各会場からの ZOOM によるリモート中継形式
隠岐広域連合立隠岐病院, 松江赤十字病院,
島根大学医学部附属病院, 島根県立中央病院,
雲南市立病院, 大田市立病院, 浜田医療センター,
益田赤十字病院

島根新生児研究会顧問：島根大学小児科 竹谷 健

島根新生児研究会事務局：島根大学小児科 吾郷 真子

当番世話人：島根県立中央病院小児科 金井 理恵

共 催：島根新生児研究会・アストラゼネカ株式会社

1. 低位鎖肛であったが瘻孔があり、発見に時間を要した1例

浜田医療センター小児科

青木 萌子, 佐藤 美愛, 齋藤 恭子

低位鎖肛で本来の肛門付近に瘻孔がある場合、発見が遅れることが少なくない。今回我々は瘻孔を伴う低位鎖肛があり、発見が日齢27になった症例を経験したため報告する。

症例は男児。胎児発育不全あり、37週1日、出生体重2,186g、アプガースコア1分値5点、5分値7点で、帝王切開で出生した。出生時特異顔貌があり、後に13番染色体q 33.1-34部分欠失と判明した。日齢24頃から、しきりに唸る様子が続いたが、自然排便得られており、経過観察としていた。その後の肛門診察で陰嚢直下に排泄口を認め、低位鎖肛であることが考えられ、外科介入となった。

瘻孔を伴う鎖肛では、便秘・排便困難などを主訴に乳児期に見つかる例があり、肛門位置に違和感がある場合には鎖肛に伴う肛門皮膚瘻であることを想起する必要がある。瘻孔を伴う鎖肛の発見時期、観察時の注意点など、文献的考察を加えて報告する。

2. 先天性右外耳道閉鎖症の2例

島根大学医学部附属病院小児科

森山あいさ, 山本 慧, 吾郷 真子

先天性外耳道閉鎖症は、多くが小耳症に伴い外耳が先天的に閉鎖している先天奇形で、10,000人に1人に発症する。この度同時期に2例の先天性右外耳道閉鎖症を経験したため、報告する。

症例1：在胎38週4日、2,968gで出生した男児。母体は不安障がいのためベンゾジアゼピン系薬剤内服中。生後右小耳症、右外耳道閉鎖症、上口唇小帯短縮を認めた。
症例2：在胎39週0日、2,860gで出生した女児。母体はパニック障がいのためSSRI内服中。生後右小耳症、右外耳道閉鎖症、左副耳を認めた。

2症例とも側頭骨CTを行い内耳構造の評価を行った。AABRは右refer、左passの結果であった。また2症例とも小耳症を合併したために早期に発見できた。今後とも引き続き耳鼻咽喉科と形成外科と連携し外来フォロー予定である。

3. 一絨毛膜二羊膜双胎一児死亡後の生存児に発症した先天性皮膚欠損症の一例

益田赤十字病院小児科

中島 香苗, 真玉 千紘, 三浦 勤

先天性皮膚欠損症は、1万出生に1~3人と報告されている稀な疾患である。原因や欠損部位、その他の合併奇形の有無などにより9つの群に分類されている。

一絨毛膜二羊膜(MD)双胎一児死亡後に出生、皮膚欠損を認めた症例を経験した。在胎35週2日、2,002gで出生、側腹部に左右対称性に星状、鶏卵大の皮膚欠損を認めた。紙様児を伴っており、先天性皮膚欠損症分類の第5群、紙様児/胎盤梗塞に関連する皮膚欠損と考えた。皮膚欠損部は、メピレックス(ソフトシリコン・ポリウレタンフォーム)保護、ハイドロサイトジェントル銀(抗菌性親水性ポリウレタンフォームドレッシング)保護、イソジンシュガーパスタ軟膏塗布でケアを行い、1ヵ月時には瘢痕治癒した。経過中、創部よりMRSA

を検出した。

MD 双胎の一児子宮内胎児死亡の場合、稀ではあるが生存児に皮膚欠損症を呈することがあり注意を要すると思われた。また、皮膚欠損部の感染予防が大切であると思われた。

4. 当院で行っている周産期メンタルヘルスカンファレンスと小児科の関わり

松江赤十字病院小児科

長谷川有紀

松江赤十字病院産婦人科

石原とも子, 渋川 昇平, 池野屋美智子

藤脇 律人, 真鍋 敦

松江赤十字病院医療社会事業部・保健師

門脇 由歌

当院ではメンタルヘルスケアが必要な妊産婦を多職種で連携して支援することを目的とし、令和3年3月から周産期メンタルヘルスカンファレンスを月1回開催している。社会的背景が複雑であったり、エジンバラ評価で9点以上を示した妊産婦を対象とし、精神疾患やシングルマザーなどの社会的ハイリスク家庭を出生前から把握することで、小児科入院となった児と母との愛着形成場面に医療者が丁寧に関われるようになった。小児科が関わった症例のまとめとともに、見えてきた課題も提示する。

5. 島根県立中央病院における COVID-19 周産期管理の現状と取り組み

島根県立中央病院小児科

平出 智裕, 川野早紀子, 小池 大輔

羽根田泰宏, 金井 理恵

COVID-19 の流行により、罹患者もしくは濃厚接触者となった妊婦の分娩が増加している。しかし、施設間の周産期管理は大きく異なっている。当院では2022年1月に初めて COVID-19 関連の分娩を経験し、12月まで18件の分娩を取り扱った。当初、全例帝王切開を行う予定であったが、可能な限り経膈分娩を行う方針に変更し、経膈分娩11件、帝王切開7件となった。新生児は、出生直後から母子分離を行い、母親の感染隔離が解除されるまで新生児室管理としている。その間、家族とはタブレットを用いたりリモート面会を行っている。生後24時間と48時間に新生児の PCR 検査を行い、陰性ならば新生児室内の隔離を解除している。また、取り扱いの観点から母乳栄養は行っておらず、人工乳を使用している。罹患者が使用した手術室や部屋、物品等は、紫外線照射ロボッ

トの導入により数時間で使用可能となった。今後も、各施設間で情報を共有していくことが、より効率的かつ有効な感染対策につながる。

6. Covid-19 に対する標準予防策の効果

浜田医療センター 4 北病棟

塩川加緒理, 吉川 景子, 周藤 葵

三浦ひかり, 石本 泰子

Covid-19 の報告がされて3年経過した。その間に、変異株の出現等病原性も変化し、最近では5類相当への移行も検討されており、今後は入院前スクリーニング検査や面会制限等も見直されている。

当院は NICU を有さず、完全母子同室体制をしない中、1つある新生児室内で産科新生児と小児科新生児を看護している。その為、一度感染者が発生すると容易にアウトブレイクしやすい現状がある。強い感染力を持つオミクロン株が猛威を振るった R4 年7月末から9月半ば過ぎ、当病棟でも新生児看護ができる看護職員のうち76%が次々と Covid-19 になった。陽性者の発生に伴い発生2日前に遡り、接触した患児に検査を行ったが全て陰性であった。

看護職員は Covid-19 の標準予防策として、日々の健康管理や手指消毒、食事時の個食の他、患者に接する時は必須でマスクやゴーグルを着用し、密接に関わる場合はビニールエプロンをしている。後日、陽性がわかった職員が接した事例もあったが陽性患児の発症はなかった。

当院の事例から、標準予防策だけでも患児に感染無く経過できたことから、標準予防策の重要性を実感したので報告する。

7. ベストプラクティス遵守による手指衛生向上への取り組み

島根大学医学部附属病院 NICU

高田 瞳, 門城すみ子, 竹田美也子

日常動作すべてにおいて他者の手を必要とする新生児では、医療者の手が媒介となった感染症を防ぐために、医療者の手指衛生の徹底が求められる。「患者区域への出入り」「モニター画面の清拭」「ケアに必要な物品の準備」「血圧測定・胃残確認・聴診・全身観察」「口腔内吸引」「オムツ交換」「SpO₂ モニター巻き替え」「体位変換・ポジショニング」「注入」の項目について、ベストプラクティスを作成した。読み合わせと演習を行い、その前後で手指衛生の実施率を比較した。ベストプラクティスにある項目をチェック形式で演習することにより、手指衛生の正しいタイミングを意識付けすることができた。

演習後、擦式アルコール消毒薬の使用量が増加しており、ベストプラクティスの遵守により、手指衛生向上に繋がったと考える。今回、この取り組みについて報告する。

8. 当院におけるグリーフケアの再検討

益田赤十字病院 4階東病棟

村上 綾, 大谷 友美, 向井 咲恵
小野奈央子, 新田 昌子, 三浦 史子

令和3年度子ども・子育て支援推進調査研究事業として、子どもを亡くした家族へのグリーフケアに関する調査研究から子どもを亡くした女性および家族の悲嘆は深く、その影響は長期にわたることが改めて確認された。支援を求めている人たちに必ずしも支援が届いていないことも明らかになった。

当院では年間約5件の死産件数がある。入院期間は約4日間と短く、その短い入院期間での対象の方との関わりの不十分さや様々な悩み、疑問を感じていた。そこで、再度グリーフケアについて知識を深め、赤ちゃんとの出会いの場面を支えることの重要性と退院後の悲嘆への支援の充実を図る必要性を感じた。現行の手順やケアの見直しに加えて、胎児死亡を告げられた時から退院に向けての支援について検討したので報告する。

【特別講演】

「ビリルビンと精神疾患」

医療法人スリーエス

林田麻衣子 先生